

授業方法について、独自に工夫している点と、アンケート結果を受けての改善点【教育科学系】

- ・メールなど、活用して授業を実施した。
- ・今後は、対面だけでなく感染状況に応じてメール、オンライン等適宜活用していきたい。

- ・感染予防のために、グループ単位での話し合いを、学びネット上でおこなった。
- ・グループでの話し合いを、オンラインでおこなえるとよい。

- ・まなびネットに慣れていない学生向けに、配布資料を詳しくした。
- ・現職教員に、教師の仕事に関する話のパワーポイント動画を作成してもらい、学びネットで流した。
- ・受講学生の教科に応じた内容を取り入れたほうがよかった。

アンケートの回答率が10~20%と結果の信頼性が低く、どちらかといえば肯定的な感想を持つ人が入力していると思われる。そのためか評価は高い傾向が認められた。それ以外の理由として、いずれも演習に関するアンケートであったため、少人数で丁寧な指導を行えたと考えられる。

授業自体の工夫としては、受講生の規模によってさまざまであるが、前半に概論を話し、後半はエクササイズや映像視聴を行うことが多い。資料も配布し、記入欄を設けて注意を喚起するように心がけている。

良くない点に関する記述がなかったことは良かったし、大きな改善が必要ないこともわかった。全体的に肯定的な評価が多かったので、このままの方針でやっていきたい。
改善ではないが、オンラインでの授業やハイブリッド型の授業のあり方については今後も継続してより効果的な方法を検討していきたい。

昨年度後期は、卒業論文演習をすべて対面で、そのほかの授業をすべてオンデマンド方式で実施した。対面で行った卒論演習は、提出期限までの間に一人少なくとも90分を確保し、事前にメール添付で送られてきた草稿を授業者が熟読し、それまでの助言や改善点がカバーできているかを中心に、必要な際には、さらなるコメントを付けた。そのコメント付きの草稿を、郵送でゼミ生自宅に送り、かれらがコメントを一通り読んだ後で、対面での個別ゼミを行う、という作業を繰り返した。

授業者の方法に満足がいったのかどうか、十分には計り知れないが、少なくとも、かれらが、必要な文献・資料を読み、考え、それを文章化するという一連の論文作成作業の難しさと楽しさを体得してくれたことはありがたいと思う。今後とも、社会人となって巣立つ前の大切な時期に、手間暇をかけて卒論を作成するという作業をともに行っていく所存である。一方、オンデマンド方式で行った授業について。比較的少人数のクラスでは、参加者と、メールで直接やり取りしながら、レポート作成の過程を見届けることができたが、100人を超える履修者のあった講義科目では、一人ひとりつながることは難しく、個人的に質問を寄せてくれた参加者には、メールで即応できたが、受講者一人ひとりの理解度を把握することは、途中2度の提出物で推し量るしかなかった。もっとも、この難しさは、対面授業においても同じであり、オンデマンドだからこそ、気軽にメールなどで質問できる環境を、これからさらに拡充していきたい。

F科目

英作文の授業を行った。毎回、音声で解説を行った後に、一定量の英語を書いて期日までに提出してもらおうという形式を採用した。作文は様々な言い方が可能であるため、文脈を設ける・語数を制限するなどして、解答が一定のパターンに収まるよう工夫した。また、成績判定の基準を明確化するとともに、次の週に模範解答を示して、自分が何点取れているのかがわかるようにした。その結果、採点に関して不満はなかったようである。

英作文は本来もっと自由に記述させるべきものと考えるが、オンライン授業であることを考えると、このようなやり方は仕方がないと思われる。

MS科目

海外旅行や留学に必要なとされる英語の聞き取りと表現の習得を中心に授業を行った。毎回、章末の問題を解答して期日までに提出してもらおうという形式を採用した。成績判定の基準を明確化するとともに、次の週に模範解答を示して、自分が何点取れているのかがはっきりわかるようにした。その結果、採点に関して不満はなかったようである。

自由記述欄におけるコメントは概ね肯定的であったが、締め切りが早いという意見が1件あった。もう少し時間的に余裕を持たせてあげた方がよかったかもしれない。

グループ活動については連絡の取り方、メンバー構成など、対面の時以上に配慮が必要であった。

- ・更新時間についても配慮が必要であった(課題の締め切りも更新時間に合わせて変更するようにしていたが、それだけでは不十分であった)。
- ・動画音声の問題については可能な限り改善を試みる必要があると感じた(台詞をできるだけ短くするなど)。

●令和2年度後期の学内における授業科目は、新型コロナウイルス感染症の感染防止に留意しながら対面授業で実施した。

学生アンケートの結果から、自分で問題点を深く考えた者は82%、新たな思考を展開した者は91%であった。今後も手指消毒、マスク着用、体調管理など感染防止に十分配慮して、できる限り対面授業による授業を実施したい。

●令和2年度後期の学外における実習科目は、実習施設の受け入れ状況に応じて臨地実習と学内演習で実施した。

学生アンケートの結果から、自分で問題点を深く考えた者は87%、新たな思考を展開した者は86%であった。今後も臨地実習が実施できない場合は、Teams等を利用したリモート講義を実習施設に依頼して指導いただけるようにしたい。

できるだけ身近な具体例を挙げ、興味を持てるように、また、できるだけ系統だった知識を提供できるよう心がけた。また、計算問題も提示し、理解を深めるよう努めた。

(授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。)の質問に対して『強くそう思う』が11%『ややそう思う』が54%であり、(授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。)の質問に対しては、『強くそう思う』が14%『ややそう思う』が43%であったので、大半の学生は自分で問題点を考え新たな思考を展開したと推測される。また、自由記述では、『自分のペースで学習が進められたので、良かった。』『資料が非常にわかりやすかった。』『自分のペースで受講ができました。』等の言葉もいただいたが、『難しい内容なのに、教科書で自分で勉強するだけで地獄でした』等の厳しい言葉もあった。リモートでの授業に限界があるのは事実なので、今後は、リモートの良い点、対面授業の良い点を生かし、授業内容に応じてリモートと対面を併用しながら、より丁寧な講義を心がけるとともに、適宜課題を課し、自己学習を促すように工夫したい。

Sh科目の基本的事項について、できるだけ体験を通して深く学べるように心がけた。また、レポートの作成方法についても必要に応じて助言した。

しかし、アンケートに答えた学生が1名だけで、『授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。』『授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。』の両質問に対して、『ややそう思う』の選択であった。

従って、学生の実習に対する受け止め方は不明であるが、実習中の様子および実習試験の結果からは概ね実習内容についての理解は得られたと推測される。今後も、実習内容を日々吟味し、より良い実習となるよう工夫したい。

回答率が16%であったことから判断するのは大変難しいが、以下のように考えている。

- ・問1で「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせて100%であった。
- このことから、課題内容や授業展開はよかったと判断している。
- ・問2で「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせて71%であった。

同様の授業を他に2コマ担当しているが、このクラスが最も低い値であり、「どちらとも言えない」が29%であった。指導するクラスの実態を踏まえ、自宅学修での課題提示を実態に合わせて変更したり、調査活動をさせたりするようにしたい。さらに、課題提出をさせることで、確実に課題処理を行わせたい。

○2020年度の後期の授業においては、授業内容に応じてより効果的な学びとなるように遠隔授業と対面授業を行うようにした。アンケート結果からは、授業方法に関して改善を求める意見はほとんど見られなかったため、概ね理解が得られたと思われる。

○1年生に対しては、入学当初から遠隔授業が続いていたことから、1回目の授業を対面授業として学生同士で交流する時間を設定したり、遠隔授業の中でも各学生が提示した資料にコメントをし合ったりなどの相互に関わり合う機会を作るようにした。

○実習科目については、新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、常時換気をするとともに座席配置を広くとるなどの配慮をしながら実施した。来学する機会が減っている中でも、学生同士でSNSやZoomで連絡や相談をし合うなど情報共有のスキルが着実に身に付いていると感じた。一方、教員側のスキルの向上が必要と思われた。

Ss科目

専攻の学部1年生が初めて聴覚障害教育に触れる授業であるので、少しでも興味関心をもてるように、学校現場での経験をもとに実際の出来事を話したり、聴覚障害児者のコミュニケーション手段である手話を導入したりして、より聴覚障害教育のイメージ化を工夫した。毎時間の授業後に感想や疑問点などを学生に記載してもらうことで、自身の授業の振り返りや、学生の理解度を把握することができた。また、学生の感想や疑問については当然の対応としてフィードバックを実施した。「知識だけでなく学校現場の話が参考になった」「楽しかった、関心を持って聞くことができた」という学生の意見は、授業の取組が反映されて、うれしい反応をもらったと考える。また、回答率が50%を越えていることも、授業に対する興味をもってもらえてこととして受け止めたい。

とは言え、初めて聞く聴覚障害教育については、どうしても教員側からの説明や情報提供が多くなってしまい、自ら関連項目について調査したり、自分で思考したりしたという項目について、回答者の10%程度が「あまりそうは思わない」「そうは思わない」と回答したことについては、今後は授業にもっとアクティブラーニングを取り入れて、「自ら思考する授業」「課題を見つける授業」の構築を進めていきたいと考える。

Ss科目

この授業は、障害専門領域に関わらず、将来特別支援学校教員を目指す学生を対象に、聾学校において、手話を使って教科指導をする模擬授業を行い、実践力を身に付けることを目的にした。選択授業であったが、予想以上に多くの学生が受講してくれ、意欲的に、主体的に取り組んでくれていた。アンケート回答者のすべてが「自分で問題点を深く考えた」「新たな思考を展開し、その思考に基づいて行動した」という項目に対して、「強くそう思う」と回答したことは、授業の目的が伝わったものとして受け止めている。

今年度は、前期の「手話の応用」に前倒して、聾学校実習を予定している障害領域の専攻の学生に同様の授業を実施している。特別支援学校教諭免許状5領域の障害種を取得する責任を自覚して、より多くの学生に受講してほしいと考えている。今後も実践的な授業を実施していきたい。

私が後期に受け持った学生はわずか20人であったが、アンケートに回答した学生はさらに少なく、わずか3人だった。全員普段からコミュニケーションを頻繁にとっている本選修の学生だから、今更わざわざアンケートで言うこともなかったのかもしれないが、次回からは、学生にアンケートを書くように促していきたい。ゼミ学生の回答が「強くそう思う」ではなく、「ややそう思う」だった。もっと卒論に向けて資料収集を早くから開始し、より主体的・対話的に研究活動をしていけるようにしていきたい。

感想として以下のようなものがあった。動画の撮影や編集に相当の時間を要したが、一定の成果は得られたように受け止めている。ただ、こちらのフィードバックにさらなる工夫も必要であった。

- 先生がうまくオンラインを活用されており、ある程度の学習はできた。
- 対面で先生に一度会って先生の人柄がわかったのが、動画授業へのモチベーションにつながった。対面で先生に一度お会いできたのが良かったです。動画授業ではわかりやすく編集していただいているのが見やすく良かったです。
- 幼稚園の動画がじっくり見られるところがよい。実習だとそんなじっくり見る暇はないと思うので。幼稚園の様子映像で、一回流し見てから繰り返し、注目する点を変えながら動画視聴ができるのが良かった。
- 対面授業で、実際に体を動かしながら身体表現について学ぶことができました。なかなか会う機会がなかった同じ幼児教育選修の子とも交流できました。毎週の授業がとても楽しみでした。ありがとうございました。前半に対面を固めて早めに授業が終了した点も良かったです。
- 本当に先生が伝えたい意図で自分が解釈できているのか不安があった。
- やはりオンラインでは限界がある。対面授業で相互コミュニケーションの上で成り立たなければならない授業と感じた。

講義科目については、テキストに対する学生の読み取り考えに対し、私なりのコメントを話すようにこころがけ、単にテキストの内容を学ぶだけではない、内容理解の深まりを促せるように工夫した。その結果、記述式アンケートの結果を見ると、おおむね好評であった。工夫に努めた甲斐があったと考えられる。前期が慣れないオンデマンド授業のために苦戦してしまい、アンケートに人格否定のようなことまで書かれてしまったので、後期はものすごい追い詰められている気分であった。それなりの結果が出て、ほっとしているところである。

受講生からは、課題として、①対面授業を聞きたかったという声、②オンデマンド型への変更を早めに知らせてほしいという声、③Zoomのブレイクアウトルーム機能を使うとより面白い授業になるという提案が出された。①はおそらく以前に私の授業を受講した学生の声であると思われるが、コロナ禍のために対面授業ができず申し訳ないという思いである。②については、今後気を付けたい(予期していない感染の急拡大があって、直前にオンデマンド型に変更せざるを得なくなった)。③については、リアルタイム型授業ができる環境が整えられれば検討してみたい。

演習科目については、自由記述式の回答がなかったので、何とも言えないが、私自身はそれなりに工夫に努めたつもりである。できるだけ今後の研究作業の見通しが見えるような助言を心がけ、論文の形式を丁寧に伝えることに務めた。ただ、論文の形式や内容にややこだわってしまい、何のために研究するのか、何のために論文を書くのかというところが弱くなってしまった。また、学生も教員も年末年始が忙しくなってしまった。次年度は改善に努めたい。

令和2年度後期の担当授業に関しては、授業論や卒業研究につながる科目など実践的かつ深い思考が求められる科目だったので、その2点は意識して取り組んだ。具体的には、学校現場に依頼し授業を参観し協議会にも参加させていただいたり、テーマに沿って自ら資料を集めまとめプレゼン、討論したりする授業を行った。アンケート結果はよかったが、回答している学生があまりにも少ないので、これをどう受け止めたらいいのか、正直わからないが、今年度も上記の視点は大切にしていこうと授業計画を立て、実践しているところである。

MS3科目の授業アンケート結果について

概ね5段階評価中4段階であり、さらに学生が主体的に研究課題を深めていけるよう教育方法を工夫していく所存です。具体的には、学生が、日常場面で関心が向く心理学的テーマを、心理学研究として設定可能になるような問いかけに対する思考を深化していくような工夫をしたいと思います。

心理実習については、実習体験を知識と結び付けて、さらに臨床知として学びを発展させたいと思います。

MS科目

・R2年度は、前期がオンデマンド授業で、試験の結果とても定着が悪く感じたため、後期は原則対面とした。
・対面授業ではあるが、パワーポイントを用い、学生の表情を見ながら説明を加えるなどしたところ、前期よりも学修内容が定着していたように見受けられた。

MS科目

・後期は実習事後報告が中心であり、報告の他実習中のインシデントについて事例研究を行う内容である。
・インシデントの検討については、ロールプレイによって事例を再現しながら行う。学生ができるだけ素直に自分の感覚や感情を表現できるようにサポートし、「あるべき」ということに偏らずに現実を直視し受け入れることができるようサポートしている。

MS科目

・回答している学生が1名のみなので一部の意見として受け止める。学生が授業をきっかけに自分で調べ、考えることができているなら、授業の目標が達成できていると考えられる。

Se科目は、1年生が初めて受講する専門科目のため、昨年度はつながりを対面授業で保ちつつ、感染防止の観点から、できるだけリスクを下げつつ対話ができるよう、ポストイットなどを活用して議論を行った。
また、感染拡大の状況を随時考慮しながら、前後の講義の受講状況を確認しオンデマンド式のディスカッションも併用して、このような状況下でも少しでも多様な価値観や意見に触れながら学びを深められるように工夫した。
また、ゲスト講師として、受講生と同じ年齢で社会に出る選択をした方をお招きし、高校におけるキャリア教育の現状とそれを受けた生徒さんの決断について、直接お話を伺う機会を持つことで、自分たちがこれから大学生として4年間学ぶことの意味を考えていただく機会とした。

アンケート結果では、対話や体験がよかったと回答いただいた点は、上記の工夫をしたことに対する一定の評価だと考えている。今後は感染拡大防止の状況を見ながら、引き続き理論的学習と体験や対話のバランスに配慮しながら講義を進めていきたい。

Se科目では、卒業論文の作成に向けて必要な方法論について学習できるよう、具体的な事例をもとに、授業を進めていった。前半は研究とは何かに始まり、問いの立て方や、論文をどのように読み込んでいくのか実際に受講生で読み解きながら理解できるよう進めている。

しかし、予習や復習に取り組んでいないという結果がアンケートで寄せられたことを踏まえ、今後は各自で取り組む課題と、受講者全員で講義を通じて学びを深める部分をもう少し切り分けて取り組み、個人でも理解を深められるようにしていきたい。

E科目では、前半オンデマンド式で理論的な学習を進め、各回の内容を理解できたかどうかについてはまなびネットの小テスト機能を活用して確認を行った。

また、オンデマンド式の講義であっても受講者同士お互いの考え方に触れ合えるよう、感想をフォーラムの形で共有したり、グループでプロジェクトに取り組む機会を持つなど、授業形態が単調にならず、また他者と共に学んでいることを実感できるように配慮した形で進めてきた。

アンケートの自由記述欄でもその点をよかった点として挙げてくれていたことからそうした意図が伝わったものと考えられる。

また、リアルタイム講義としてZOOMを活用した講義を3回行ったが、それぞれ接続の環境や事情はあるなかでも工夫して参加し、感染リスクを考えずに活発に議論できた点は、今後も生かしていきたいと考えている。

Mc科目

- ・ 対面授業を中心として、遠隔授業を交えて実施した
- ・ 対面授業では、コロナ感染に配慮して授業を進めた
- ・ 遠隔授業では、学生の負担を考慮しながら対面授業の振り返りや補足する課題を出した
- ・ 回答者数が少ないため一概に言えないが、主体的に授業に参加した学生が比較的多かったことは良かったと思う
- ・ コロナが今後も収まらないことを見据えて、対面授業と遠隔授業を上手く組み合わせたい

Sc科目

- ・ 対面授業を中心として、遠隔授業を交えて実施した
- ・ 対面授業では、コロナ感染に配慮して授業を進めた
- ・ 遠隔授業では、学生の負担を考慮しながら対面授業の振り返りや補足する課題を出した
- ・ 学生が主体的に課題に取り組む回答が7割以上であったことは良かったと思う
- ・ 主体的に取り組めなかった学生も少数見られたことで、今後の指導における改善を図りたい

Sc科目

- ・ 少人数での授業であったため、対面授業により実施した
- ・ コロナ感染に配慮しながら授業を進めた
- ・ 回答者が1名であったが、授業への主体的な参加を促せたと思う

Sc科目

- ・ 対面授業を中心として、遠隔授業を交えて実施した
- ・ 対面授業では、コロナ感染に配慮して授業を進めた
- ・ 遠隔授業では、学生が各自で学びを深められることを意図した課題を工夫した
- ・ 回答者数が少ないため一概に言えないが、学生が自身で課題を見つけ主体的に取り組んでくれたことは良かったと思う

COVID-19禍であったが、実習科目のため、ほとんど対面で授業を行った。感染対策として、朝の検温に加え授業直前の体温・脈拍・血圧測定・体調の記録をさせ確認した。手指消毒薬を適宜使い、フェイスシールドなどを用いて、感染対策を徹底した。これらにより、実習が行えたことで、学生の間1・間2へは「強くそう思う」「そう思う」と思考・判断などの獲得につながったと考える。

COVID-19禍のため、まなびネットとTeamsを用いた授業を行った。わからない所を、Teams で対面の質問時間を用意し、説明を補足したため、満足度が高くなったと思われる。ただし、まなびネットの教材に音声を追加できなかったため、不満足な学生も出たと思われる。

学問に対する基礎的な理解を深めたいうえで、その知識をもとに主体的に考え、行動できるような応用力を身につけられるような授業構成を心がけたいと思います。

F科目の2コマ、そしてL科目1コマの授業アンケートを見たが、オンライン(オンデマンド)で用いた独自教材の評判が非常に良かったことに十分な手ごたえを感じた。
評価の高かったポイントは、「語り掛けるように作られていること」で、今後とも、オンデマンド教材を作成する時は、この点に特に留意して作っていききたい。

本年度は、オンデマンド授業を中心に実施しました。その中では、主に動画を撮影し、編集し、YouTubeにアップして、それを受講生のみなさんに視聴して頂きました。その動画の制作段階では、ドローンを使って風景の変化を盛り込んだり、一瞬で物が変化したり入れ替わったりする効果を盛り込んだりすることによって、受講生のみなさんに楽しんで授業を受けて頂くことができるように工夫しました。担当する授業の多くは、ものづくりを実際に行う実技の授業であるため、対面授業が最適であることは言うまでもありません。その中で、今回は動画を視聴しながら制作して頂き、そしてそれらの制作物を提出して頂く際もデータのみとさせて頂きましたので、受講生のみなさんにとっては、対面授業に比べて手間が掛かって大変だったことと思います。今後はそのあたりを改善できればと思っています。

【独自に工夫している点】

2021年度は遠隔授業(オンデマンド型)ということもあり、授業動画の作成が必要になった。動画の作成に際しては、見やすいスライド作り、情報の明確な提示、分かりやすい授業展開、教科書や補足資料への効果的な指示(関連づけ)に注意した。また、学生の負担が過重にならないよう課題提示の回数を抑えるとともに、フィードバックにも心がけた。

【アンケート結果を受けての改善点】

オンデマンド型授業ということもあり、2020年度前期は受講生相互の意見交換の場を設定することが難しかったが、後期は「まなびネット」の「フォーラム」をある程度活用することができた。

課題(小レポート)の頻度は、授業3回につき1回とした。このレポート提示のタイミングや提出期間までの時間的な余裕については高評価をえることができた。課題に対するフィードバックにも心がけてきたが、受講生によっては不十分に感じている回答もあった。課題(小レポート)の提出期限(時刻)を12時30分としてきたが、この点を「良くなかった点」にあげている受講者がいた。こうした点について検討し、改善していききたい。

なるべく課題を出すだけでなく、それについての感想をアップすることで、なるべく双方向的なコミュニケーションの雰囲気だけでも感じられるように工夫した。資料として別に図などを配布したが、もう少し多くてもよかったかもしれない。資料の引用元については記載したつもりだが、抜けがあったかもしれないので注意したいと思う。

まなびネットのフォーラム機能を使って、ネット上でディスカッションを行いました。自分で調べて積極的に投稿する学生が多かった反面、投稿の少ない学生もいました。また対面ではないので学生の非言語的な情報がわかりにくい伝えにくかったように思います。ネットを通じて、対面と変わらない授業ができるように改善していききたいと思います。

対面形式の授業では、視聴覚教材を含む多様な資料を用いたり、具体的な状況と場面を想定したケーススタディを採用したりしながら、受講生自らが理論と実践を結びつけることができるよう工夫している。また、学術的な研究の楽しさを実感できるような対話を心がけている。そのため、概ね授業目標を達成することができ、受講生もある程度、満足していることがわかった。しかし、オンデマンドの遠隔授業では、学びネットの機能を十分に活用できていないため、受講生の中には授業の目的を理解できない学生がいたり、また、課題に負担感のある学生がいたりした。今後は、学びネットの様々な機能を活用できるよう努力し、遠隔授業の内容と方法を工夫したい。

教員ではなく、学生が主導して行う活動を重視しています。また、対面の授業だけではなく、すべてのやり取りや課題の提出等は「まなびネット」等を通して行います。そのため、学習者の記録が残り、学習者はデジタルポートフォリオとして活用できるようにしています。今回も、たいへん面白い課題提出があり、私も授業を楽しませてもらいました。一方で、受講者の数が少ないので、もう少し、授業の宣伝？に力を入れていきたいと考えます。

問1の回答「強くそう思う」や「ややそう思う」は80%以上なので、大丈夫だと思います。(全科目の集計は77%程度)。

オンラインでの授業を実施するにおいて、教材配信と課題量及びその提出期間が学生の負担にならない程度で、かつ学びの保障もしなければならないことが困難であり、実際に学生の学びに繋がっているのかいまだに不安である。ただ、このような状況において、対面はもちろん、ZOOMでの顔合わせを取り入れることで学生の安心感を担保できることは分かった。来年度も現在の授業形態が続くことは考えたくないが、オンラインだからできたこともあると思われる。

F科目については、コロナ感染拡大に伴い、例年通りの対面による授業進行ができなかったため、途中からオンデマンド型の遠隔授業を取り入れたが、対面に比べると基礎固めが難しかった。また受講生も大変だったと思うが、大方の受講生はよく頑張ってくれたと思う。大学のサーバー負担を考慮し、Youtubeを活用した。
MS科目については、遠隔であってもなるべく全員が発言できるように、声掛けを意識した。

基礎的理論の習得の他、実際の器具に触れながら理解を深める授業のため、対面と遠隔(オンデマンド)を組み合わせたハイブリッド型授業を実施した。授業方法について、受講生からは、配布されたレジュメが詳細かつ具体的で深い学習につながったという肯定的なコメントがある一方で、配布された資料だけでは難解で専門性が高く理解が不十分に終わってしまったという否定的なコメントがあり、受講生の理解度に関心が認められた。また、配布資料の分量(印刷量)にも課題が残った。これらを踏まえ、感染状況にもよるが、今年度は受講生の反応をみながら進められる対面型授業を実施したいと考える。また非常勤の先生とペアで担当する授業のため、より良い授業方法について協議しながら進めたい。

Se科目では、授業者からテーマを提示し、それに対する調査、報告を基本形式として授業を進めた。受講者数、回答数も少ないので検証する情報が少ないが、問1、2ともに「強くそう思う」と回答があったことから、受講生にとって多少は有効な授業方法であったと言える。

Se科目では、受講者自身の問題関心を探究課題として設定させ、それに対する調査、報告を基本形式として授業を進めた。受講者数、回答数も少ないので検証する情報が少ないが、問1、2ともに「強くそう思う」と回答があったことから、受講生にとって多少は有効な授業方法であったと言える。

授業では、毎回プレゼンテーションソフトやGoogle formsなどのICTを活用して学生の内発的動機づけを高める講義を心がけている。主として、授業の前半は理論的解説(含む映像教材を用いた学習)を行い、後半は「ロールプレイ」や「実習」を随時取り入れ、学生自身が主体的に授業に参加できるよう工夫している。さらに、授業の最後には毎回「リアクションシート」を配布し、次回の授業の冒頭にプレゼンテーションソフトを使い学生の質問に回答することで、双方向の授業を心がけている。また、学生の授業外の学習効果促進のため、学生に対しては授業課題レポートを課し、提出された全員のレポートについては、内容及び形式面に関するフィードバックを行っている。昨年度はすべてオンラインというイレギュラーな形の講義が多かったため、改善が必要な点が多く見つかったため、今年度以降改善に努める予定である。

後期の授業は対面で行うことを基本に、学生によってはオンデマンドでの代替を可能とした。学生に2つの選択肢を用意するとともに、オンデマンドでの資料配信、課題の提出、質問や意見交換を行うことも可とした。また、これまではゲストスピーカーに來校していただき行っていた授業をオンラインで行うことで、ゲストスピーカーの負担を軽減することや、來校していただくことが難しいゲストへの依頼が叶ったことなどがあった。

アンケート結果からは前期と比べると回答者数が少なく改善を求める意見もなかったが、学生にとってもアンケート疲れがあるのではないと思われる。

コロナ禍のオンデマンド授業において、履修生が主体的に取り組める課題を考えた。アンケートでもその点が表れているように思う。さらにそうした観点からの課題を考えたい。

対面／オンデマンドのいずれにおいても、複数の見解を提示した上で学生に考えさせるよう努めている。学生が提出したコメントに対するフィードバックが少ないという意見があったので、できるだけ多くフィードバックするよう努めたい。

・授業で気をつけていることは、動画教材ではなく、講義録形式(文字起こしをする、パワポの画面を一部貼り付ける)をとっていることです。動画教材は視覚的に負担がかかり、また教員の発言をきちんと把握してもらうためには、文字で追ってもらう方が適切だと考えたからです。そのような教材が、今回の授業アンケートの自由記入欄で、肯定的な評価をもらうことができ、苦勞した甲斐がありました。今後も、遠隔授業が続くことが予想されるため、他大学等の取り組みも学びつつ、遠隔と対面とをうまく組み合わせた授業づくりを進めていきたいと考えています。

独自に工夫している点

対面の講義では、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するために、できる限り間隔を空けつつ、討議できるような場を提供した。1年生向けの講義(オンライン)では、大学に入構できない状況を考え、大学に関する小話を入れて大学との繋がりを意識させた。

アンケート結果を受けて

学生の発展的な学習の活動ができるような指示は必要であると感じた。

アンケート結果からは、授業についてそれなりに良好に受け止めてもらっていることが窺えました。

授業方法について、特別に工夫をしているというほどのことはありませんが、誠意をもってしっかりと進められるように対応していきたいと思っています。

受講生が学習内容を理解しやすい授業の流れを組み立てることと、疑問に思ったことを受けつけ丁寧に回答すること。

講師を始めてから2年目です。講師として経験が少なく、まだまだ知らないことが多いですが、大学の方に相談しながら、1年目の経験で学んだことや調べて学んでいることなどを授業で生かそうとしています。後期の授業方法を決める前にアンケートして、その結果に基づいて遠隔授業に決めて、パワーポイントを使ったスライドショーにしました。連絡方法は、メールやラインにしました。授業のメソッドは、前期と同じで、自分で考えた「パズル」という文章の作り方を使いました。このメソッドでは、ポルトガル語の複雑な文法が面白いパズルのように見られると思います。課題は、学生さんが書いて回答するものと録音するものにして、その課題のフィードバックを積極的にやって、遠隔授業であっても、学生さんはポルトガル語を聞く、話す、読む、書くことが出来たと思います。ただし、どうしてもF科目はリアルなポルトガル語との接触や皆での練習などが少なかったため、対面授業が多くなったF科目でその分を頑張りたいと思います。これからも精一杯努力して、将来学生さんが先生になったときに役立つポルトガル語を教えていきたいと思っています。

ロールプレイや事例検討を取り入れ、それぞれで意見を言い合う授業にして積極的に考える授業にした。ただ、その回数が少なく、講義の部分は対面ではない方が良いという感想もあったので、対面ならではの双方向的な手法も取り入れたい。